

氏名（本籍）	にしだ みか （鹿児島県）		
学位の種類	博士（社会福祉学）		
学位記番号	甲 福第 26 号		
学位授与年月日	令和 3 年 9 月 18 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項		
論文題目	アルコール依存症者のレジリエンスとセルフヘルプグループ活動との関連に関する研究 —レジリエンスの向上と支援—		
論文審査委員	主査	佐野 正彦 教授	社会学修士(東洋大学)
	副査	松元 泰英 教授	医学博士(鹿児島大学)
	副査	田畑 洋一 客員教授	文学博士(東北大学)
	副査	高山 忠雄 元教授	教育学博士(東北大学)
	副査	河野 正輝 元教授(九州大学)	法学博士(九州大学)

論文内容の要旨

1 問題の所在

世間にはギャンブル、ゲーム、薬物、買い物などに熱狂的・病的に身を投じている人[投じていた人]が思いのほか多いのかも知れない。本論文は、こうした依存的性向を持った人間類型のなかで、特にアルコール依存症の人間を巡る問題圏に止目し、そうした人間類型にも、自らを蝕みかねない問題を跳ね返す自発的・内在的な力、すなわち「レジリエンス」(resilience: 回復力, 復元力, 弾力)が内在していることを認め、それがいかなるものなのかを詳述し、その力・レジリエンスを強化・活性化していくことを通じて、アルコール依存症を克服していく方途は如何に可能なのかを真摯に論究している。本論文の論述はこうした意図のもとに編まれた学術的営為として読まれるべきものである。

そもそもレジリエンスとは何だろうか、それは本当に人びとに内在する力なのだろうか、その実在性を容認するとして。それは容易に誰もが持ちうる力なのだろうか…など様々な問題が次々と現れいずるが、西田はそれぞれの問いに真摯に向き合って応答している。本博士論文の論述はそうした知的格闘の足跡でもある。

既述のように、アルコール依存症から立ち直り、当たり前の生活を営めるようになるためには、当人に内在するレジリエンス内容の明確化とその活性化を図ることが肝要となる訳だが、西田によればこのことを実現するには、自助グループとも呼ばれる SHG (Self Help Group) の活動が重要となる。本論文は、アルコール依存症と対峙している 2 つの SHG の参加者に対して、ヒアリング調査とアンケート調査を遂行することによって、この問題に対

する SHG 活動の貢献を丁寧に検証している。

2 研究の課題と方法

本研究はアルコール依存症に関わる論考である。アルコールを初めギャンブル、ゲーム、薬物、買い物などに見られる人間の依存症的性向は、少し大袈裟に言えば、人間存在の根幹に関わる問題圏に位置づけられるものなのであり、それは非常に根深い難問のひとつとなる。端的に言って、簡単には依存症的な状態から抜け出せない。それゆえ、私たち現代人がそこから自覚的に帰還・回復・正常化するのは、そんなに簡単なことではなく、かなり難しいことなのである。

こうした課題に立ち向かうには、西田がそうであるように、真正面から取り組むほかはないのである。西田は、字義どおりの意味で真摯にこの問題に対峙し、精神保健福祉の領域でとみに注目を集めている「レジリエンス」概念にその活路を見出して丹念に議論展開している。

いいかえれば、レジリエンスを要素・要因的に遡及・還元して、その内実はいったいいかなるものなのかを真摯に探究している。こうして、西田はレジリエンス概念を量的・質的調査を通じて忠実に検証している。

3 本論文の構成と特徴

本論文の構成は次のとおりである。すなわち、「はじめに一問題の所在、先行研究、研究目的・方法、本論文の構成」、第1章「アルコール依存症とレジリエンス」、第2章「アルコール依存症者のライフストーリーから捉えるレジリエンス要因とレジリエンスを高める要因」、第3章「アルコール依存症支援の実際」、第4章「アンケート調査から捉えるアルコール依存症者のレジリエンス」、第5章「インタビュー調査から捉えるアルコール依存症者の背景とレジリエンス」、「おわりに—総合考察」である。

導入部にあたる「はじめに」を受けて第1章では、アルコール依存症とセルフヘルプグループの関係の重要性が指摘され、レジリエンス概念が説明され、レジリエンスを構成するレジリエンス構成要素とレジリエンス測定尺度の開発に関わる斯界の動向がまとめられている。

第2章では、まずライフストーリーの立場からアルコール依存症者のレジリエンス要因を捉え、レジリエンスを高める要因を考察している。アルコール依存症者のレジリエンスをライフストーリーから捉える理由は、「病理と生活を切り離して考えるのではなく、社会生活のなかでその人がどのような困難を抱え、……アルコールと出会い、依存したのかを辿る必要がある」と考えたからである。

第3章では、アルコール依存症支援の実際として、アルコール専門病院における治療プログラムとアルコール依存症者のレジリエンス向上について検討している。また、地域におけるアルコール依存症の治療や支援の実態と課題についても整理している。そこでは、「地域におけるアルコール依存症の理解不足」、「地域における支援環境基盤づくり」、「自助グ

ループ（SHG）機能の多重性」などの諸視点が吐露されている。

第4章では、まず、森ら（2002）によって作成されたレジリエンス尺度を用いたアルコール依存症者と非依存症者に対するアンケート調査の結果を検討して、両者のレジリエンス要因を比較し、その結果を整理している。また、平野（2010）によって作成されたBRS（二次元レジリエンス要因尺度：Bidimensional Resilience Scale）を用いたアンケート調査から、アルコール依存症者の資質的・獲得的レジリエンス要因の解明を目指すとともに、SHG活動や社会生活との関連性についても整理することを試みている。

第5章では、まず、アルコール依存症者とその家族に対するインタビュー調査を通じて、アルコール依存症者とその家族が抱える困難さとそこからの回復を支える要因について考察している。西田によれば、「インタビュー対象者が、アルコールではなく、家族や仲間、専門職、地域の人々とのつながりにより困難を生き抜いている」のであり、このことは、「快樂のためにアルコールを用いているのではなく、困難を生き抜くためにアルコールという物質を必要とする自己治療仮説」を証明していると言う。次に、SHGの活動がアルコール依存症者のレジリエンス要因を高めていることも論述している。

最後に「おわりに—総合考察」において、アルコール依存症者のレジリエンスの要因が総括的に整理されており、続いてレジリエンスを高める要因、さらにSHG活動によるアルコール依存症者のレジリエンスの向上・強化に論及している。また、アルコール依存症者のレジリエンス向上を目指す支援と今後の課題と、本研究の限界と展望について述べている。「アルコール依存症者のレジリエンスは、まず、アルコール依存症者自身が回復したいと願い、それを支える家族、SHGの仲間、専門家の存在によって向上していく」ものだという。

4 本研究の結論と今後の課題

本研究の結論は、レジリエンスの向上がアルコール依存症からの回復に繋がるというものである。西田は、これを質的調査と量的調査を行うことによって実証している。端的に言ってしまうと、SHG活動がアルコール依存症者のレジリエンス向上に影響していることを実証している。

SHGの特徴や支援的特性は、本研究で実証したアルコール依存症者のレジリエンスとそのレジリエンスが向上する状況には重複的關係もしくは相互反映的關係がある。いいかえれば、SHG活動がアルコール依存症者のレジリエンス向上につながることを裏付ける一つのエビデンスとなってもいる。

アルコール依存症者のレジリエンス向上が、アルコール依存症者自身が回復したいと願うことに始まるのは確かだが、それを支える家族、SHGの仲間、専門家の存在によって着実に向上していくものと位置づけられるのである。

とりあえず、「レジリエンス要因としての「社交性」の向上→SHG活動の活性化→レジリエンス向上→アルコール依存症からの回復・立ち直り」といった経路が見出されるが、「社交性」が低いアルコール依存症者への支援について考える場合、SHGにつながるための方法(論)を検討しなければならないだろう。つまり、レジリエンス要因としての「社交性」の

向上を図る必要がある。比喩的に言えば、水を飲ませるために水飲み場まで誘導する必要があるだろう。そのためには、彼らを支える家族、SHG の仲間、専門家の存在が欠かせないのである。ここにレジリエンスと家族・SHG・専門家の重複的・相互反映的關係が認められる。

西田も述べているように、今後は例えば、SHG につなげるために必要なレジリエンス要因のひとつである「社交性」が低いアルコール依存症者への支援について、その方法論を検討しなければならないのである(水飲み場への誘導)。繰り返しになるが、例えば、必要なレジリエンス要因である「社交性」が低調なアルコール依存症者に対する SHG につながるための支援について、方法論的に検討しなければならないだろう。

西田によれば、この研究でアルコール依存症者のレジリエンス要因の解明とレジリエンスを高める要因の明確化、SHG 活動によるアルコール依存症者のレジリエンスの変化を実証した。また、方法論の共有化のためには誰もが容易に理解可能となるレジリエンス要因の尺度化を進めていくことも大切である。いいかえれば、アルコール依存症者のレジリエンスを詳細に把握するための「独自の測定尺度」を作成することが望まれる。この点の認識を持って今後の研究を進めてもらいたいと思う。これにより方法論の共有化がある程度進行していくものと思われるし、それゆえ、アルコール依存症から解放されるチャンスも増大していくものと思われるのである。

審査結果の要旨

1. 研究の継続性

西田は、高等学校（衛生看護専攻）卒業後、看護学校に進学しこれを卒業して「看護師」として病院勤めを経験した後、福祉的視座の必要性を感じて鹿児島国際大学社会学部社会福祉学科に入学し、2002(平成14)年3月にこれを卒業している。その後、医療機関における「医療ソーシャルワーカー」の職を経て再び大学に戻り、鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科社会福祉学専攻博士前期（修士）課程に進学し、2008(平成20)年3月にこれを修了している。こうして大学入学以来西田は、一貫して医療福祉分野や精神保健福祉分野に興味を持って研究と教育を積み重ねている。因みに、修士論文のタイトルは「ソーシャル・インクルージョンの視点から捉える精神障害者の地域生活支援—当事者が自主運営する有限会社『萌』の活動を通して—」である。

修士課程修了後の2008年4月に「九州保健福祉大学」に助手として採用され、研鑽を積み重ね現在は講師の職位にある。現在の勤務校に赴任以降、研究・教育活動のなかでアルコール依存症の問題圏に関わり続け、今日に至っている。

本博士論文は現勤務校に赴任以来10年以上にわたって一貫して、「アルコール依存症」の問題圏に関心を持ち続けてきた西田の手に成る論考であり、「レジリエンス」をキー概念としてその解決の方途を探ろうとしたものである。まずは10年以上にわたって研鑽を積み重ねてきており、今後さらにこのフィールドで調査研究のキャリアを積み重ね、相当程度の業績を産出していくことが期待できる。とりわけ、独自の「レジリエンス測定尺度」を開発し、レジリエンス概念のさらなる明瞭化・洗練化・共有化が期待される場所である。そして、こうした学的・実践的営為によって、より一層のアルコール依存症の問題圏への貢献が期待できる。

2. 論文の完成度

まず、本論文はアルコール依存症者のレジリエンスに関する量的・質的調査から得られたデータを分析することによって、アルコール依存症者のレジリエンス内容を要素・要因的に明らかにしている。そして、レジリエンスとSHGの活動との関係性に止目して、レジリエンスを維持・強化するのにSHG活動が肝要であることを指摘し、実証的な調査研究に依拠して説明している。日常の困難や苦痛を緩和するために一時的に薬物やアルコールなどの「依存物質」に手を出し依存症に至ってしまうという「自己治療仮説」が知られている。この仮説の背景には実は生きようとする人間の力が潜在している、と言う。つまり、直面する問題に対する解決策として採用されたものなのである。しかし、問題の根本的な解決はこうした不適切な浅薄なやり方ではなく、つまり依存物質に頼らないで、「適正なやり方」により克服するものでなければならない。それがなかなか困難であるという点が問題なのである。西田は、家族とともに参加するSHG活動との連携においてレジリエンスを強化するこ

とによって、それは達成されることになると言う。

こうした流れのなかで、アルコール依存症者の潜在力を認める、なだいなだ(久里浜方式、治療の主体は自分)、George E. Vaillant (自然回復力：natural healing force)、斎藤学(共依存、共嗜癖)、窪田暁子(エンパワーメント)などの先行的研究を正当に評価したうえで、西田も同様の解決の方向性のひとつとして個々の行為者＝アルコール依存症者に内在するレジリエンスを指摘し、その強化を主張している。すなわち、アルコール依存症者の持つレジリエンスに主体的・能動的な可能性を認め、相当程度詳細に説明している。今後の課題としては「独自のレジリエンス測定尺度の創設」を目指したいとも述べている。

周到に解読された実証的資料に裏打ちされて、次から次へと繰り出される記述内容は、真に博士の学位に相応しい内容となっている。

3. 本論文の特徴・評価

本論文の特徴は、質的・量的調査研究により得られた、諸結果に徹頭徹尾依拠した議論展開にある。いわば、実証的に検証するという視点に貫かれていることがあげられ、それは論文全体を通して相当程度貫徹されている。

本論文の学位審査委員会としては、レジリエンス概念の内容とその重要性について丹念に論究している点は全会一致で認めるところであり、それゆえ全員が評価している。しかし、当事者への着目が目立ち過ぎ、その社会的背景への配視が不十分ではないかとか、レジリエンスはアルコール依存症の問題にかかわる複合的領域の一部分に過ぎないにもかかわらずその他の領域への目配せが足りないのではないかといった諸点について質疑応答が交わされた。そして、学位審査委員会としては指摘された諸点より幾つかの検討事項と修正事項について意見交換が行われ、それらについて共通理解が形成された。その結果、そうした諸点への必要な修正を行うことを前提に、本審査委員会は当論文を博士（社会福祉学）の学位に適合する「博士論文」であることを全会一致で決定した。